

田中復興大臣宮城県訪問ぶら下がり会見録
(令和元年9月30日(月)16:10～16:17於)気仙沼市)

1. 発言要旨

皆様、こんにちは。

本日は、名取市、東松島市、石巻市、女川町、南三陸町と気仙沼市を訪問し、市長、町長並びに議長をはじめ議会関係者の皆様方に復興大臣就任の御挨拶と併せて視察等を行い、要望も承ったところでございます。

生活インフラの復旧など、復興は着実に前進しておりますが、まだ完成に向けて全力で取り組んでおられるところもたくさんございます。

2020年度までに復興をやり遂げるという決意のもと、復興の加速化に大臣として取り組んでまいりたいと思います。

引き続き自治体の連携を強めながら現場主義を、そして被災地の皆様方の心に沿いながら、このことを一番に私もしっかりと考えながら、復興に全力を尽くしてまいりたいと思います。

宮城県の地は、今回の東日本大震災の被災地として一番多くの方が亡くなられた県でもございます。私たちは亡くなられた方々のまさしく御冥福を祈ることとあわせて、ぜひ復興をなし遂げて、そのお気持ちに報いることができるという思いでございます。

どうぞ、マスコミの皆さんにおかれましても、今後とも御指導賜りますように、お願いを申し上げます。

私の最初の話はここまででございますが、御質問等があると思いますので承りたいと思っております。

2. 質疑応答

(問) 今回、かなり広範囲の視察で、1か所あたりが短くて駆け足になったと思います。その中で見られるのはなかなか大変だったと思うのですが、改めてごらんになって印象的だったところ、あるいは短い時間で逆に現状をどこまで把握できたのかと我々はちょっと疑問にも思うのですが、そのあたりはいかがですか。

(答) 私は大臣になりまして、福島県、そして岩手県、宮城県、日程の調整をしながら自治体を回らせていただいているところです。

確かに自治体の数が多いものですから、また一方では、早く状況を私自身が把握しなければならないものですから、条件はあるものの、なるべく自治体の首長さん、あるいは議会の関係者の方々、あるいは民間で一生懸命取り組んでおられる方々の御意見を承りたいという思いで歩いておるところです。

もちろん限られた条件の中ではございますけれども、今日も大変

真剣なお話を承っておりまして、それなりに成果があったとお
っておるところです。

私自身、ご存じの方もいると思いますが、野党で自民党のシャド
ー・キャビネットの環境大臣をやっているときにこの災害が起こ
りまして、当時、環境常任委員会の野党側の筆頭理事でしたので、
各所に当時調査にまいりました。

また、与党に戻ったときは、環境副大臣として被災地の復興、復
旧に携わってまいりましたので、当時の状況といろいろな意味で
比較しながらずっと回らせていただいているわけでございます。

確かに地域によっては、見事に復興、復旧をなし遂げられた地域
もございますけれども、やはりまだまだ道半ばということもござ
いますので、私もそういう意味ではいろいろな考えを持ちつつ努
力をさせていただきたいと思っております。以上でございます。

(問) 復興・創生期間後の復興庁のあり方をどのように今、お考えで
しょうか。

(答) 各所でお尋ねがございまして、議会関係者の方からもいろい
ろな御要望もいただいておりますが、総理の御指示のもとに、
年内にいろいろな調整を行いつつ取りまとめしていくことができ
ばと思っております。

そのときに、やはり被災地、自治体の皆さん、そして被災者の
方々の思いを私は一番尊重して今後のあり方については取りまと
めていかなければいけない。そして、できれば、来年の通常国会
に御審議をお願いしなければいけないのだろうと思っております。

いつもお話が出ますが、財源の話、税の話等々あるわけですし、
これは相当真剣な取り組み、また、検討をしなければならぬわ
けですが、あくまでも地元の声を大切に考えて対応していきたい
と思っております。以上でございます。

(問) 復興・創生期間終了後のことなのですけれども、多分、今日ご
覧になってわかるとおり、恐らくハード面でも終わらない所もあ
る。それから、被災地の一番の問題というか、皆さんが心配して
いるのはソフト面の支援なのですけれども、2020年度以降も确实
に復興庁として見捨てることなく支援していただけるというこ
とは言っていただけでしょうか。

(答) 当然のことでございます。特にソフト面こそが復興にとってこ
れから一番大切なことになっていくと思っております。

住宅の中でも、災害公営住宅にひとり暮らしのお年寄りの方々も
いらっしゃいまして、心のケアは大切だと思いますし、また、各
所でも人材不足の面もございまして、また、産業面、生業(なり
わい)の面でも、まだまだこれからソフト面でいろいろな御協
力をさせていただかなければなりません。そういう意味では、今お

っしかったように、とにかくこの10年で終わるということではなくて、まさしくこれからが勝負だという思いを持っておるところでございます。

(以 上)